

## “Ruwatan” における「供え物」(Sajen)

中島, 成久  
法政大学

<https://doi.org/10.15017/2232290>

---

出版情報 : 九州人類学会報. 9/10, pp.68-72, 1982-06-01. Kyushu Anthropological Association  
バージョン :  
権利関係 :



# “Ruwatan”における「供え物」(Sajen)

中 島 成 久 (法政大学)

ジャワ人の中では、あるカテゴリーに属する人々(一人っ子、きょうだい二人、三人きょうだいの中で真中だけが異性、炊飯中に鍋を倒した人など)は、最高神ブトロ・グルが海中に誤って落とした性液より生まれたムルウォコロ(Murwakala)にその肉体を食べられるという恐怖感がある。そうしたカテゴリーに属する人々が、彼らの身の上にかかるかもしれない危険をはらうためにおこなう儀礼が“Ruwatan”なのである。

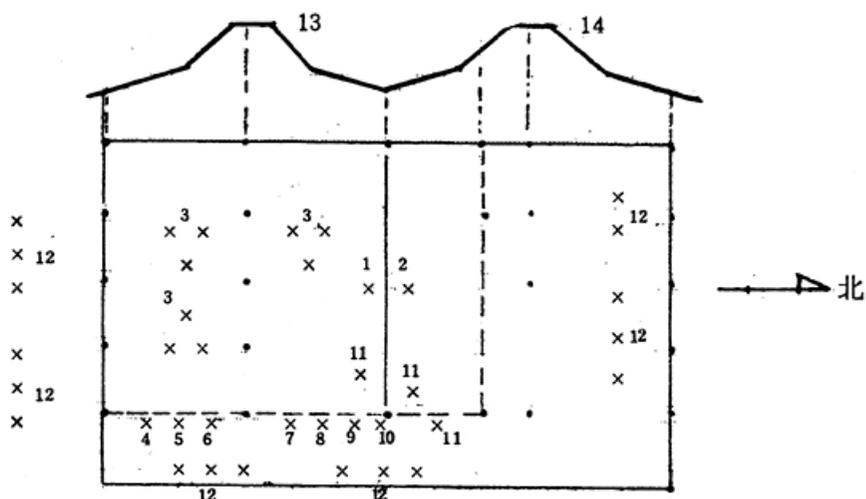
これは、ワヤンの上演という形式をとっておこなわれる儀礼であるが、普通のワヤンの上演と比べると、はるかに秘儀的な要素が目につく儀礼である。<sup>[補注1]</sup> “Ruwatan”でおこなわれる演目は、殆どの場合「ムルウォコロ」である点。“Ruwatan”をおこなうダラン(ワヤンの人形師;大抵の場合、ガムラン楽隊と一種の劇団を構成している)は、呪文(mantra)を唱え、儀礼対象者を水で浄める役割をもつ呪師である点。会場に供えられた数多くの「供え物」(Sajen)の種類とその意味するもの。又、「ムルウォコロ」上演に際するいくつかのタブー(ワヤン上演中は寝てはならない—このためにワヤンは昼間おこなわれる—、妊婦は見てはならない……など)の存在。こうした点に、“Ruwatan”の独自性が伺える。

今回は紙数の都合で、“Ruwatan”における「供え物」(Sajen)について、覚え書という形で報告したい。詳細な検討は、別の機会におこなうことにしたい。

私は、81年10月26日と、82年1月20日の二回、実際に“Ruwatan”をみることができた。前者の場合、儀礼の対象者は、22才(既婚)と18才(未婚)の2人の女の姉妹であり、18才の娘の婚約<sup>(2)</sup>(ijab)を機におこなわれた。後者の場合、男の一人っ子(高校生)が儀礼の対象者であった。

第1図は、前者の“Ruwatan”の会場の平面図であり、第2図は、その会場を“dhebog”と呼ばれるバナナの幹(ワヤンの人形をさすところ、大地を象徴している)の部分の断面図である。(第1図、番号1, 2の中間線)

1. ダラン 2. 儀礼対象者
3. ガムラン
4. “enthok”( ? ; つがい)
5. ガチョウ ( “ )
6. アヒル ( “ )
7. ハト ( “ )
8. “pucer”( 一種のハト、つがい)
9. ニワトリ (つがい)



第1図 Ruwatan 会場平面図

10. スキ 11. "tumpang" 12. 見物人 13. プンドボ(正面) 14. ダレム(奥)

1. "dhebog"
2. "klir"(幕)
3. "blencong"
4. "batik"(13枚)
5. "tulak bala"(包まれた米)
6. 天井
7. "pisang"(バナナの実)
8. "krambil"(ヤシの実)
9. ワヤンの人形

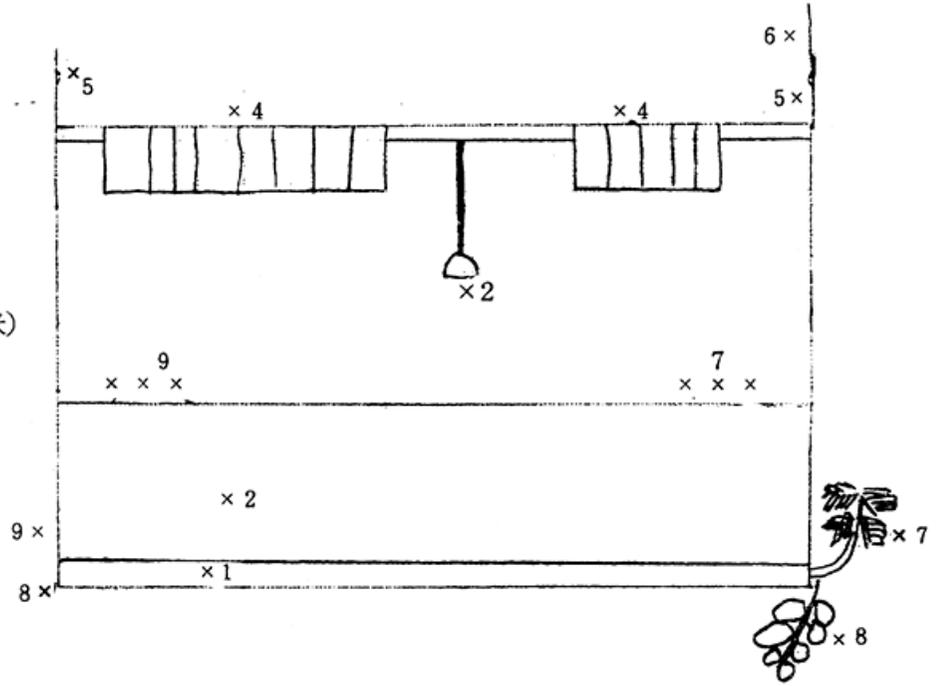


図2. ワヤン会場の断面図(奥から正面)

第1図11の“tumpang”は、必ず7ヶの円錐形の山で構成されている。7という数字はジャワでは、1, 5, 9とともに聖数をなしている。図2の3の“blencong”(ヤシ油を燃やすライト)の中には、7ヶの貨幣が入られるべきであると、今年1月20日“Ruwatan”をやったダランは私に言った。東部ジャワ、マラン近郊に住むあるダランは、“tumpang”の7は人間の体を象徴していると教えてくれた。それは、①Bru(皮膚の毛)、②Klit(皮膚)、③Darah(血)、④Daging(肉)、⑤Otok(血管)、⑥Tulang(骨)、⑦Samsam(骨の髄)をそれぞれ意味している。①から⑦の各要素によって人間(ここでは儀礼の対象者)は構成されており、彼の代わりにムルウォコロに捧げられたのである。米は人間に消化・吸収されて、①から⑦の人体の各要素に転化する。だから“tumpang”はご飯より成っているのである。

第I図11.にスキが見られるのは次の理由からである。スキ(bajak)を使って農作業中、誤ってそのスキを折った農夫も“Ruwatan”によってムルウォコロの危険を避けなければならない。そこで、折れていないスキの存在は、ムルウォコロに対抗する<sup>ちから</sup>力能をもっていると考えられるだろう。このスキは、いわば魔除けである。

同じことは、図2の8のヤシの実についても当てはまる。ムルウォコロは、ブトロ・グルの規定したカテゴリーの人々を求めてこの世をさまよっている。彼らがまだ“Ruwatan”を受けていないならば、それはムルウォコロの餌食とされるであろう。Rassersの紹介したムルウォコロの<sup>ラコン</sup>演目の最後は次のようになっている。ムルウォコロに追いかけられたある一人っ子は、“Ruwatan”の最中であるワヤンの会場に隠れた。そのことを知っているムルウォコロは、会場の近くのヤシの物蔭に身を隠して中を伺っていた。その時、ダランが呪文(mantra)を唱え始めたので、ムルウォコロは体が熱くなるのを感じ、

その場を立ち去らざるを得なかった。<sup>(3)</sup> 大地を象徴するバナナの幹 (“dhebog”) のかたわらにあるヤシの実はこの事実よりきている。ムルウォコロはこのヤシの実を越えて、その先の “Ruwatan” を受けている儀礼の対象者までは近づくことができないのである。図2の9のバナナの実についても同様であろうと思われるが、このことを裏づける事実はまだ確認することができていない。

先に “tumpang” は、人間の体を象徴しており、それは人間に代ってムルウォコロに捧げられたものであると述べた。こうした、ある種のスケープ・ゴート説で、図2の5の “tulak bala” (包まれた米) も解釈できる。Ulbricht は、ムルウォコロの演目を紹介して、ムルウォコロの目を欺くために、ダランが米を用いるか、あるいはムルウォコロに追われている人間が米を用いるかで説が分かれている<sup>(4)</sup>、と述べている。私は観察した “Ruwatan” を録音したものの、未だそれを文字化していないので、私のみた “Ruwatan” では誰がムルウォコロを欺くかは明らかではないが、“tulak bala” も人間の代替をする役割を荷っている。

「供え物」(Sajen) の中に、ガチョウ、ハト、ニワトリなどのひとつがいの鳥類がいる(図1の4～9)。これらが、ムルウォコロに捧げられたスケープ・ゴートであるのか、あるいは魔除けであるのかについては、現時点では分らない。(〔補注2〕参照)。

最後に、スクリーン(klir)の上に架けられた “batik” (図2の4)の意味を検討してみよう。

“batik” は全部で13枚架かっており、ダレム(奥)からプンドポ(正面)を見て、左から順に次のような名前と色(理念上の)が与えられている。

- |   |                                 |
|---|---------------------------------|
| 1. Semen Latar Putih. 白.                | 2. Semen Latar Item (Hitam), 黒. |
| 3. Gadhung Mlati, 緑/白                   | 4. Bangu Tulak, 黒/白             |
| 5. Tuluh Matu, 黒/白                      | 6. Lasem, 黒/白                   |
| 7. Parung Rusak, 色不明                    |                                 |
| 8. Slarak Kandang, 家畜小屋の戸をデザイン化したもの、色不明 |                                 |
| 9. Semen Putih, 白、1に同じ                  |                                 |
| 10. Kawon, Kawonの実をデザイン化したもの、色不明        |                                 |
| 11. Parang Rusak, 色不明、7に同じ              |                                 |
| 12. Semen Latar Item (Hitam), 黒. 2に同じ   |                                 |
| 13. Tuluh Matu, 黒/白、4に同じ                |                                 |

“Batik” は13枚であるが、1と9、2と12、4と13、7と11がダブっているから、種類としては9枚である。82年1月にみた “Ruwatan” では、9枚であったから、2回の “Ruwatan” において “Batik” は9枚であったと考えてよいだろう(9は聖数である)。7(11), 8, 11の3つの色は不明である。残りは、3の緑/白を除いて、いずれも白黒の単色か、白/黒のくみ合わせより成りたっている。白と黒の単色を、お互いに対比しているものとして捉えると、架けられた “Batik” は黒と白の対比より成っていると考えられるだろう。

ここに何か意味があるのだろうか。すべての色が明らかでないから、何らかの結論を出すことはでき

ないと言えるだろうし、白と黒の対比という換元をおこなうことも可能だと主張できるだろう。ただ、“Batik”の中で白と黒の格子縞模様が入った“Poleng”は非常に呪力のあるものとジャワでは考えられている。ワヤンのキャラクターの中で、風神バユ、パンダワ五兄弟の中で最も武力に優れたビモ、それにラーマ（のちにクリスノ）の従者である猿のアノマンだけが、この“Poleng”の“Batik”を身につけている。彼らはそれぞれ異常な能力を持っている。更に、インドネシア独立戦争中、“Poleng”を身につけておれば、たとえ敵の銃弾を受けても、それは体を貫通することがないと信じられていた。“Poleng”をつけていれば不死身であり、銃弾をもはじく能力があるとされていた。このような事実を考えるならば、“Klir”（スクリーン）の上に架けられた“Batik”の色の対比は非常に意味のあることになるようだ。もしこの推察が正しいならば、その“Batik”は、白と黒の対比によって生じる呪力によって、ムルウォコロに対抗しているものと解釈することができる。

“Ruwatan”については、まだまだ分らないことが多い。<sup>(6)</sup> 私がみた“Ruwatan”では、“Klir”（スクリーン）は下半分しかなかった。普通のワヤンでは、ダランの前面すべてが白い幕でおおわれるから不思議である。これは当のダランにとっても謎である。東部ジャワのクディリに住むダラン（“Ruwatan”経験者）は、自分の場合そんなことはなく普通のワヤンと同じように“Klir”は自分の前面をおおうと断言した。又、私も彼が“Ruwatan”をやっている時の写真を見たが、そのようであった。

“Ruwatan”については、さすがのRassersも解釈を放棄している<sup>(5)</sup>が、私には古い農耕儀礼から派生した儀礼のような気がする（米と人間の一体化などがその根拠）。こうした“Ruwatan”の本質についての考察は将来の課題である。だがここでは、そこに供えられた数多くの“Sajeng”は、スケープ・ゴートの的にムルウォコロに捧げられたもの（tumpang, tulakbala など）と、ムルウォコロの侵入を防ぐ魔除け的なもの（スキ、ヤシの実、パティクなど）との二種類に大別できると結論づけることができる。

### 〔注〕

(1) 今回の報告は、九人研の会場で発表したテーマとは異なる。その時発表したテーマについては、既に他の雑誌に発表したし、又、これから発表する予定である。下記の拙稿参照。

スマールをめぐる分類、象徴、隠諭の世界、「アジア・アフリカ言語文化研究」第23号、東京外大A・A研、1982. p. 73 - 90.

「南海の女王にささげられたワヤン劇」『儀礼とシンボリズム』（吉田禎吾編著）、九大出版会、1983. 出版予定。

(2) ジャワ人の結婚式は3つの段階がある。“ijab”はその第一段階であり、“naib”という地域の宗教的事務取扱者の所で、結婚の登録をする。次に、“naib”が花嫁側に来た時なされる

“slametan”. 最後に最も重要な“Ketemuan”（顔合わせ）の儀式がある。これは花嫁の側でと

- りおこなわれる。Hildred Geertz : The Javanese Family, 1961. p. 65.
- (3) W. H. Rassers : On the Meaning of Javanese Drama, in "Panji, the Culture Hero", 1959. p. 47 - 48.
- (4) H. Ulbricht : "Wayang Purwa, shadows of the past", 1970. p. 110.
- (5) W. H. Rassers : ibid, p. 55 - 56.
- (6) ムルウォコロの<sup>ラコン</sup>演目については次の書物が詳しい。  
松本 亮 : 『ジャワ影絵芝居考』 濤書房 1975. p. 25 - 133. 松本氏の記録している<sup>ラコン</sup>演目は、Rassers や Ulbricht の記録したものと、その細部ではかなり異っている。松本氏の記録では、"Ruwatan" における "Sajen" の内容については明らかでないが、"Ruwatan" におけるタブーの内容で私の観察した事例と異なるものがある。
- [補注1] Yogyakarta の Gunung kidul 地方でかつておこなわれていたネズミの害をはらう儀礼は、この "Ruwatan" と本質的には全く同じである。  
Mr. C. J. G. Becht : Rattenplaag - Bezwering in Goenoen Kidoel, Djawa, 1939. Vol. 19, p. 258 - 259.
- [補注2] Yogyakarta の王宮の Pusaka を清浄する儀礼 (Upacara Siraman) において、儀礼の前夜に供えられる Sajen の内容と殆ど同じである。たが、今のところその意味までは分らない。  
Barsono : Upacara Siraman Pusaka-2 Karaton Ngayogyakarta Hadiningrat, 未刊。